

書 評

Senri Sonoyama, *Poetyka i pragmatyka pieśni waka w dworskiej komunikacji literackiej okresu Heian (794-1185)*, Wydawnictwo Uniwersytetu Jagiellońskiego, 2019, 322 pp.

(園山千里『平安時代の宮廷文学における和歌の詩法と実態 (794年～1185年)』ヤギェロン大学出版社 (ポーランド・クラクフ)、2019 年、322ページ、原著ポーランド語)

沼野 充義

園山千里氏の著書 *Poetyka i pragmatyka pieśni waka w dworskiej komunikacji literackiej okresu Heian (794-1185)* は、日本人の日本文学研究者によっておそらく史上初めてポーランド語で書かれた日本文学研究書である。このことをまず特筆しておきたい。著者の園山千里氏は平安時代の宮廷文学の専門家で、2009年3月に立教大学で論文『「枕草子」と法会の研究』によって博士号を取得後、同年10月からポーランドの古都クラクフにある、同国最古のヤギェロン大学文学部東洋学研究所日本・中国研究学科で准教授として教鞭を執ってきた。なお、園山氏は本書によって2021年にポーランドでハビリタツィヤ (第2博士号、正教授資格) を授与された。

日本ではあまり知られていないかもしれないが、ポーランドは日本文学研究が大変盛んな国で、クラクフの他、首都のワルシャワを初めとして、ポズナニ、トルンなどの大学に日本語日本文学の専攻学科があり、多くの学生を集めている。当然、ネイティヴスピーカーの語学教師として教えている日本人も多数にのぼる。しかし、園山氏は日本文学のアカデミックな研究者として専任の准教授を務め、人文社会系の分野ではワルシャワ大学と並んでポーランド最高峰のヤギェロン大学の日本語日本文学研究・教育の高い水準を支え、発展させてきた (ちなみに日本で言えば、クラクフは京都、ワルシャワは東京に相当すると言えば、分かりやすいだろう。大都会ワルシャワが政治・経済の中心であるのに対して、ヤギェロン大学のあるクラクフは古い歴史と高い文化と学問の水準を誇る古都である)。このような存在はポーランド中でも園山氏ただ一人である。

しかも園山氏は稀に見る語学的才能を発揮して、短期間にヨーロッパの諸言語の中でも特に難しいと言われるポーランド語を習得し、みずからポーランド語でこの堂々たる研究書を書き上げた。まずはこのことを歴史的快挙——これは決して大袈裟ではない——として称えたい。

ここで急いでお断りしなければならないのだが、この書評の著者は、日本文学の専門家ではない。ロシア・ポーランドを中心に、日本も視野に入れながら世界文学を広い視野から研究してきた者であり、本来、このような研究書を専門的な立場から批評できる立場にはない。ただし、ポーランド文学も研究対象の一つとしているためポーランドとは研究上の縁が深く、長年にわたりワルシャワやクラクフの多くの日本学者と交流し、共同の研究や学会活動も行ってきた。ワルシャワ大学の日本語学科では一年間客員講師を務めた経験もある。この書評は、そういう立場から、園山氏の著書を日本の専門家の皆さんに紹介するためにあえてあえて買って出たものである。ポーランド語という言語の壁にはなかなか

越えがたいものがあり、そのせいで園山氏の著書が日本でまったく紹介されないままで終わったら、あまりにも残念なことだ。

まず本書のタイトルだが、冒頭に掲げた邦題『平安時代の宮廷文学における和歌の詩法と実態』は本書の扉裏に掲げられたもので、おそらく著者自身の意向によるものだろうが、ポーランド語の原題とは微妙に違っている。まず原題では「実態」に相当するのは *pragmatyka* で、英語ならば *pragmatics*、つまり言語学では「語用論」と通常訳される用語である。ここではそれを敷衍して、詩学の体系と、それを実際に用いる人々やそれが実際に運用される状況や文脈との関係に焦点を当ててこの用語が用いられている。だから普通の日本語で言えば「実態」となる。もう一つ、邦題の「宮廷文学」に相当するポーランド語はより正確に言えば「宮廷の文学的コミュニケーション」となっている。この原題は園山氏の和歌論の姿勢を端的に示すものと言えるだろう。つまり詩学そのものを内在的に分析、批評するだけでなく、和歌がどのような場で実際に詠まれ、やりとりされ、批評され、どのようなコミュニケーションの役割を果たしたかを重視するという姿勢である。園山氏自身が序文で次のように書いている——「(……) 強調しなければならないのは、著者の主たる目的が、和歌を平安の宮廷の環境における文学的コミュニケーションの特別なジャンル、さらに広い意味で人と人とのコミュニケーションの特別なジャンルとして提示することである」(本書7ページ、沼野訳、以下同様)。文学テキストはテキストのみで単独に存在して文学として成立するわけではなく、それを書く人・享受する人とそれを成立させるコミュニケーションの「場」が必要だという、当然のアプローチなのだが、邦題がそこをややおとなく「宮廷文学」と抑えてしまったのは、おそらく「文学的コミュニケーション」という言い方が日本語では熟しておらず、不必要に目立つのを避けるためかもしれない。ポーランド語の原題と邦題の間の微細な違いにこだわったのは、意味のずれをあげつらいたいからではなく、そもそも著者自身が付けたに違いない邦題に「誤訳」などありようもない。ただ実質的に同じことを言うにしても、日波の表現がこのように微妙に異なるということ自体、じつは、ポーランド語によって日本の詩学を分析することを通じて、日本人が日本語で日本文学を研究する際とは違う光が対象に当てられる可能性を示唆していると言えないだろうか。

たったいまお断りしたように、拙文は書評というよりは紹介の意味が大きいものなので、本書がどのような構成で書かれ、どんな題材を扱っているか、読者におおよそのイメージをつかんでいただくために、まず目次を簡略な形で示すことにする。() 内は評者(沼野)による補足説明である。

序論

- 0.1. 文学史の歴史区分としての平安時代
- 0.2. 日本の文学研究の立場からみた和歌
- 0.3. 二種類の和歌—儀礼的な和歌と個人的な和歌
- 0.4. 現在までの和歌をめぐる先行研究

第Ⅰ部 和歌の誕生—日本の和歌の形成

- 1.1. 二重言語使用状況における固有言語の文学
- 1.2. 和歌とそれらの形式
- 1.3. 本書での和歌の表記について
- 1.4. 和歌の記載方法—表意文字の漢字と音節文字の仮名
- 1.5. 記紀歌謡にみられる和歌の原形
- 1.6. 古代歌謡の歌体について
- 1.7. 伝統的な和歌の修辞（この節では、以下、枕詞、掛詞、序詞、縁語、本歌取りなどの修辞技法が解説される。日本の専門家には不要な基本的な用語の整理だが、ポーランド人の日本学者には不可欠なものであり、日本語で当然と思われる概念がポーランド語で論理的に説明されることによって明快に見えてくるものも多い。）

第Ⅱ部

勅撰和歌集—王朝時代にみられる和歌芸術に対する「メセナ」の働き

- 2.1. 『古今和歌集』の発生
- 2.2. 『古今和歌集』の構成と部立（以下、部立に沿って、和歌の実例を挙げながら詩法の分析と解釈が進められていく。）
- 2.3. 『古今和歌集』のモチーフとプロット
- 2.4. 『万葉集』の三大部立との比較
- 2.5. 古今伝授としての和歌
- 2.6. 「歌語」という表現方法

第Ⅲ部 宮廷文化活動としての和歌—歌の形成と日本的な歌の受容

- 3.1. 『後撰和歌集』
- 3.2. 平安時代のコミュニケーション手段としての和歌—打聞と歌語りとの関連から
- 3.3. 韻文と散文とその他の文書に現れる和歌の共存
- 3.4. 宮廷社会における教養としての和歌と書

結論

目次立てを見ればおおそ推測できるように、三部構成のうち、第Ⅰ部では和歌の形成とその条件、そして修辞の基本などを確認したうえで、第Ⅱ部では『古今和歌集』、第Ⅲ部では『古今和歌集』に次いで編纂された勅撰和歌集である『後撰和歌集』を主に取り上げ、具体的な和歌の例を多くの場合、日本語の漢字かな交じり表記、ひらがなのみの表記、ローマ字による発音表記、さらにはポーランド語訳の四点セットで引きながら解説・分析を加えていく。ポーランドには日本文学の翻訳に関してそれなりの蓄積があり、和歌について言えば、本書の序文（7ページ）でも断っているように、不世出の言語学者ヴィエスワフ・コタンスキ、日本文学研究の大家ミコワイ・メラノヴィチから、もっと若いイヴォ

ナ・コルジンスカ＝ナヴロツカ、アンナ・ザレフスカ、クシシュトフ・オルシェフスキに至るまで、歴代の研究者によって優れたポーランド語訳の蓄積があり、本書でもそれらの先行翻訳がふんだんに引用されていて、その意味では本書も真空から生まれたわけではなく、ポーランドにおける日本文学研究の土台のうえに成り立っているという側面はあるのだが、その一方で、日本の古典詩学についてこのような本格的な研究書はポーランドでは皆無だった。つまり本書は、比喩的に言えば、ポーランドで準備された土壌の上に開いた大輪の日本の花である。

ただし、日本育ちの日本文学研究がそのまま挿し木されたわけではない。本書における個別の和歌の分析や解釈の当否について論ずることは書評者の手に余るが、私から見て興味深い本書の特徴的なアプローチや理論的前提はしばしば日本の伝統的な方法論を超えていて、ヨーロッパと日本の本格的な比較文学とまではいかないにしても（比較文学的アプローチはもともと著者の目指すところではなかった）、両者の興味深い接点や対照が新鮮な視点をしばしばもたらしている。

例えば第Ⅰ部で園山氏は和歌が形成され成立していった時代の日本では漢文（中国語）とやまと言葉（土着の日本語）の二重言語使用（バイリンガリズム）の状態であったことを強調し、『古今和歌集』の分析を通じて、和歌に代表される日本語による文学的ジャンルが日本固有の文化を形成する原動力になったことを論じている。この論自体にはおそらく新奇な要素はないが、著者はここで中世から近代初期にかけてポーランドでラテン語が文章語として広く使われ、ポーランドもまたバイリンガル状態であったことを指摘し（52-53ページ）、ポーランドにおけるラテン語の役割と日本における中国語の役割の共通性と相違を的確に指摘している。私から一言付け加えるならば、16世紀のポーランド・ルネッサンス最大の詩人ヤン・コハノフスキは近代ポーランド詩の創始者と見なされているが、じつはラテン語による創作もポーランド語による創作とほぼ同じくらい行っていた。こういった二重言語使用状態を経て近代文学が次第に外国語からその国固有の言語へと一本化していくプロセスは、漢文を公的に書いていた男の文人たちがやがて親密圏における私的表現に切り替わっていく流れと比較して検討することができるだろう。¹

ポーランド文学と比較するもう一つの興味深い視点は、和歌のある種の自発的・即興的な朗誦が、ポーランド・ロマン主義の詩と比較できるのではないか、というものである。園山氏によれば、「歌人が何らかの現象を観察し、それが歌人を感動させ、同じ場所にいる人たちと自分の感覚を分かち合う必要を呼び起こしたとき、和歌はしばしばそういった現象に対する詩的反応として作られ、声に出して読まれる」（272ページ）のだとすれば、それはアダム・ミツケヴィチのような即興を得意としたポーランド・ロマン主義を代表する詩人を思い起こさせるというのである。実際、ミツケヴィチの代表作の一つである戯曲『父祖たちの祭り』第三部（1832年執筆）には、主人公コンラッドの「大インプロヴィゼーション」と呼ばれるモノローグがあって非常に有名である。園山氏はただちに、和歌は31音の音数律の要求に結びついているので、ロマン派的な即興とは原則的に違っているとあって、「即興的な朗誦」の東西比較にはそれ以上踏み込まないのだが、普通には思いつかないような興味深い視点である。

もう一つだけ例を追加するならば、現在の日本国歌「君が代」の歌詞として採られた『古今和歌集』の「わが君は千代に八千代に……」について、園山氏はこれが特定の君主などに向けられた願ひとして荘重に朗誦されるならば、権力者を称えるヨーロッパの頌詩（オード）を思い起こさせると指摘している。しかし、常に特定の権力者に宛てられたヨーロッパの頌詩と違って、日本の詩学はより曖昧である。「君が代」について言えば、園山氏はこれが特に天皇という特定された宛先に向けられたものではなく、単に（おそらく身分の高い）誰かに向けられた長寿の願ひに過ぎないという可能性もある、と言う（39ページ）。この議論自体も、日本では特に耳新しいものではないかもしれないが、園山氏の論の独創的なところは、こういった解釈の揺れ、あるいは幅をもたすのが、和歌が pragmatyka の観点から実際に「運用」されるコミュニケーションの場の違いだという考え方を導入している点ではないかと思う。

こういった議論の前提として、園山氏はハレ（晴）とケ（褻）の二項対立的な概念を導入する。本書の序論の「0.3 二種類の和歌—儀礼的な和歌と個人的な和歌—」でいう「儀礼的な和歌」が「ハレの歌」、「個人的な和歌」が「ケの歌」である。「ハレ」と「ケ」は言うまでもなく柳田國男以来、民俗学や文化人類学で広く採用されている概念だが（これをロシアの文芸理論につなげるならば、「ハレ」はカーニヴァルの転倒、「ケ」は日常、ということになるだろう。園山氏の議論にカーニヴァル論をかませるとどうということになるか、興味深い）、園山氏はこれが和歌の解釈にどのように適用されるか、様々な先行研究を概観し、民族学者桜井徳太郎のケ→ケガレ→ハレの循環説まで紹介して（33ページ）、「ハレ」と「ケ」の単純な二項対立には限界があることを示したうえで、菊池靖彦の「褻」「晴」かは歌の用いられる場、詠出される場によって決るのであって、多くの場合、一首の本来的な性格ではないはずである」という主張を紹介し（36ページ）、自らも「場」におけるコミュニケーションとして和歌の pragmatics 「運用論」を一貫して展開していくのである。さらにこの「場」の考え方を補強するために、園山氏は心理学者クルト・レヴィン Kurt Lewin の提唱した、個人とその場の相互作用のパターンを探求する「場の理論」の考え方にも言及している（31ページ）。

ここまでの紹介でも明らかなように、園山氏の和歌論を貫く一本の筋は——やや乱暴なまとめ方になるかもしれないが——具体的な場において運用される特別な文学的コミュニケーションとしての和歌というとらえ方である。和歌における「演技性」を重視する渡部泰明の「儀礼的空間」論も当然、この文脈に入ってくる（31ページ注40など）。²

この先、園山氏の浩瀚な研究書には、ここまでに私が触れることができなかつた様々な魅力的なトピックが詰まっている。特に第 III 部は、和歌が平安時代のコミュニケーション手段としてどのように機能していたかという問題について、「打聞」「歌語り」「手紙」という観点から掘り下げられている。園山氏の整理によれば、「打聞」とは印象的な歌を記録して仲間と共有する行為（歌集ができる前の前段階）、また「歌語り」というものもあり、これは誰かが詠んだ歌について批評しあう行為である。さらに贈答歌のやりとりを考えると、和歌は一種の「手紙」としても機能していた。ヨーロッパ文学における手紙ということと言うならば、書簡体小説の伝統は、中世フランスのアベラールとエロイズの

往復書簡を一つのモデルとして、近代では決して珍しくないものだし、詩について言えば、サロンのな少人数のコミュニケーションが成り立っていた一九世紀初頭までくらは、友人の間で詩をやりとりしたり、集まったときに朗読したしすることは珍しくなかった。書簡体小説という形式は日本ではあまり普及しなかったものだが、その代わりに日本では古来、和歌が手紙のやりとりの役割を果たしてきたとも考えられる。

ただし和歌は書かれた形ではなく、口頭の吟詠の形で交換されることもあった（ここでワルター・オングが明快に論じた「声の文化」（オラリティ）と「文字の文化」（リテラシー）という問題系列につなげて論を展開することもできるだろう）。³ こういった話題をすべて統合すると、園山氏はじつは日本文芸の中でもっとも伝統的なジャンルを実証的に研究しながら、現代のメディア理論の最先端に立てる場所にいることが分かる。

本書に提示されている話題の数々は、今後さらなる展開が期待できる魅力的なフィールドを形成している。日本の古典文学研究の素養を身に付け、ポーランドで長年ヨーロッパの文学研究の方法と接してきた著者ならではの、本書を土台として今後のさらなる発展を期待したい。

最後に、『日本文学史』の著書もある、現代ポーランドを代表する日本文学研究の泰斗、元ワルシャワ大学教授のミコワイ・メラノヴィチによる本書に対する書評を引用して締めくくりとさせていただく。

本書で提示されている「日本の歌」の分析と解釈は、最新の日本の資料を利用してだけでなく、日本の文学研究・言語学上の主張や仮説とヨーロッパの概念を調和のうちに結び付けたポーランド初の革新的な業績である。

それゆえ園山氏の著書は、和歌の誕生の歴史的背景、「やまと歌」と呼ばれた宮廷詩の構造と文体の規範を初めて包括的に扱った、この分野では間違いなくヨーロッパで最も重要な研究の一つである。

この本を読むと、文学や言語学の多くの領域で教えられることが多い。それゆえ、園山千里博士の *Poetyka i pragmatyka pieśni waka w dworskiej komunikacji literackiej okresu Heian (794-1185)* が、ポーランド語による日本の古典詩歌研究の発展において非常に重要な出来事であることに、疑問の余地はない。⁴

【注】

¹ この点に関して興味深い新しい研究書として、本題からややそれるが、第10回南原繁賞を受賞した、宋哈『平安朝文人論』（東京大学出版会、2021年）を挙げておく。これは、9世紀初頭の嵯峨朝時代からほぼ三世紀を視野に入れ、平安朝の「文人」たちの漢文作品の変遷を追いつながら、漢文による表現が集団を前提とした公共性から個人の私的表現の領域へと発展していった過程を描き出した論文であり、バイリンガルな状態であった平安朝の文学について、漢文の側から園山氏の和歌研究とパラレルな作業を行ったものとして興味深い。本書について詳しく

は、沼野充義「第10回東京大学南原繁記念出版賞 講評」、『UP』2020年3月号、58-59ページ、を参照。

² ついでながら、学術誌の書評に全くふさわしくない個人的な脱線の一つ挟むと、現在国文学資料館館長を務める学界の重鎮、渡部氏には、学生時代に野田秀樹とともに演劇活動をしたという意外な経歴がある。私も渡部氏も野田秀樹も同じ高校の出身で、私は一学年下の野田の天才的な演劇活動を高校時代から身近に見ていた。渡部氏の和歌論に見られる演劇性への傾斜の原点は野田秀樹とともに過ごした演劇青年時代の経験があったと想像すると、和歌というものに秘められたダイナミックな性格が少し浮かび上がってくるのではないかと。妄言多謝。

³ ウォルター・J・オンゲ『声の文化と文字の文化』桜井直文他訳、藤原書店、1991年。英語原著 Walter J. Ong, *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word*. London: Methuen, 1982.

⁴ インターネット記事 Mikołaj Melanowicz, “Poezja japońska waka.” URL: <https://pisarze.pl/2019/12/23/mikolaj-melanowicz-poezja-japonska-waka/> (2021年5月31日閲覧)